

一・青の傭兵団

視線の先には赤い岩壁が見えていた。

近くに視線を落としても、遠くに目を放つても荒々しい赤い岩肌しか見えない。上空へ視線を向けると、紅く染まった空が広がっている。この空には朝が来ることもなく、夜に身を沈めることもない。永遠なる夕陽が空を染めている。空も、大地も全て紅に染まっていた。ここレッドサルンは赤色に包まれた土地だ。雨は降らず、大気は乾燥し、大地は岩石に覆われ、申し訳程度の草すら生えていない。別名「赤色の土地」と呼ばれた。

レッドサルンは開拓者達を頑強に拒んだ土地として多くの者に記憶されている。岩肌は硬く、そのくせ中心部へいくほど強固な粘度を有している。あらゆる工作機械を碎き、開拓者の希望を碎き、最後には開拓の意思を碎いた。幾度も開拓者は訪れた。大小様々な洞窟が多い地形を生かし天然の倉庫に出来ないか、居住区に活かせないか。

様々な検討がなされたが、全ては徒勞に終わった。中でも開拓者を困らせたのは通信手段だった。一旦、洞窟に身を潜らせると、電波・電磁波・衛星通信・フォースの念波すら届かずコミュニケーションの方法を失ってしまう。その為、彼らは太古の民族がそうしたようにケーブルを繋ぎ、直結式の通話を強いられた。

次に問題となったのが平地がないことだ。空から輸送するにしても通常的手段では着地すら出来ない。高額の多脚自走車であるヘリユートで着陸する必要がある。しかし、いずれの場合も地上との荷物の受け渡しが困難であった。時折吹き荒れる乾いた凶風がそれらを困難にさせた。次第に開拓者の足は遠のき、一刻は悪鬼羅漢の巣窟となったが、その悪鬼どもすら放棄することになる。ほどなくして銀河警察の介入はなくなり、何者も訪れることがなくなった。

これらは「青の傭兵団」にとって都合がよかった。

数ある傭兵団の中でも彼らは資金力と技術力、統率力を兼ね備えた。傭兵団としては群を抜く一角として知られている。戦争屋と呼ばれる傭兵団が多い中、彼らは自治系政府の護衛や拉致、移送に長けた軍団として知られていた。仕事と同時に現れ、仕

事が終われば掻き消すようになくなる。拠点を掴まれることは過去に幾らもない。彼らに仕事を依頼するのは簡単だ。彼らのサイトにコードVTを送信するだけでいい。後は返事を待つだけだ。彼らの目に止まれば返事があるだろう。

「こちらVT。仕事を始めよう」

当然ながらジュゲはVTのことをよく知っていた。彼女も元傭兵だ。決まった軍団に属することはない彼女だったが、必要に応じて一時的に所属することはあった。彼女は主に戦争屋に所属していたため本来彼らと利害関係が一致することはない。だが一度利害が相反すると話は別だ。事実、刀を交えたことはあった。あるミッションでは要人の脱出を青の傭兵団が請け負い、ジュゲは殲滅にその身を埋めていた。だが、ジュゲにとって、彼らと張り合う気は毛頭ない。彼女にとってのミッションとは、ヒューマーをこの世から抹殺することであつたからだ。

「あら懐かしい。虐殺人形がきてますよ」

「え？虎パンか。うお、ほんとだ。ここんところ戦場から姿を消したと思ったらこんなところにいやがった」

「良かったじゃない。あなたタイプだったんでしょ」

「はあつ？・・・まあ、タイプっちゃタイプなのかもしれない」

「嘘、ビショップ本気ですの？ キング、アリス、これ見て」

「ハンターキラーのジユゲが・・・しばらく姿を見せないと思ったらこんなところにいるとは。姿も隠さず何を考えている。アリス、クイーン追跡されたのか」

「そんなはずは！ 私たちは完璧だったわ」

「アリスも同感。パーペキだったよ。華麗過ぎて自分に惚れ惚れしちゃったしい」

「なら、あれはなんだ」

「わかんないよお。だって、あの時は銀河警察の間抜け達をかわして、月の住人の追撃もかわしで、挙句に潜伏している並み居るチェイサー達をもかわしたんよ。それはそれは可愛くね」

「そして美しくね」

「追跡モニターも白だったしい。追いつがってきたウサギが二頭いたけど、それぞれ

振り切ったしね。一頭なんかダミーにまんまとだまされてさー気分は最高よう」

「エクスタシィね」

「では、あれはなんだ」

「だって、連中は追手にいなかったよお」

「おりませんでしたね」

「偶然とは思えない。追っ手の中にはいなかったが、ならんらかの方法で追跡してきたか・・・」

「少なくとも私が把握していたウサギにはおりませんわ」

「別な案件か、それとも・・・ん？」

モニターには岩の上に仁王立ちになったジュゲが映し出される。その横にはヨッコラショっとばかりに辛うじて岩を登りきったハリユウトが立った。彼女がハリユウトに耳打ちすると、ハリユウトは口をパクっと魚のように大きくあけ、オルゴールの仕掛け人形のようにクルクルと回り始めた。

「えーテスト。只今マイクのテスト中。あー青の傭兵団につぐ。探すのがメンド臭いので出てきなさい」

ジグゲの音声がハリユウトの口を拡声器として響くと、岩に数々反響していった。キング達は一瞬間を見合わせる。

「出てこないとそちらに直接いっちゃいますよー。嫌なら出てきなさい。五分待ちます。私は気が短いです」

そう彼女は言うのと、その場に座り込みハリユウトの手を引っ張った。

「我々が目当てということは確定したな」

ぼつが悪そうにクイーンは肩をすぼめた。

「あん？なんなんだアイツら・・・？」

「どうしたビショップ」

「見ろよ。あの二人は何をしているんだ」

「拡大しろ」

モニターが彼女の手元を拡大する。

「アヤトリだあ！」

彼らはアリスを除いて再び顔を見合わせた。

「古代人類の遊びですね」

「ふん。追跡されたかどうかの判断は置いておいて、何が目的だ？まさか我々のブツが目当てということはあるまいが」

「どうしますかキング」

「俺、会いにいつてもいいつぜえ」

「ビショップ、相手の意図が知りたい。少し様子をみよう」

「なんか面白そうじゃねーか」（虎パンよお、何企んでる）

少しするとジューゲは再び立ち上がり、また同じようにハリユウトがクルクルとゆっくり回りだした。どうやら五分が過ぎたようだ。

「時間でーす。それじゃーいきまーす」

そう言うのとハリユウトの手を引っ張って彼女は岩の下に飛び降りた。モニター外「だ」視界から消える。

「カメラをチェックしろ。人体熱源検索オールレンジ」

にわかには慌しくなる。そこへ、

「どーもー。お邪魔しまーす」「メタリック」

全員が凍りついた。

モニターに写っていた筈の二人が船内にいる。

異邦人を除いた全員が思い思いの武器を手にとっていた。

「おーとつとつとつと、丸腰！まー・るー・ごー・し！ホラ、万歳」

ジュゲが手をあげると、ハリユウトは彼女を見て同じように手を上げる。

「ど、どうしてですの！どうやって私の船内に、な、なぜですの？」

「アリス、どうなっている！」

「うっそー、わかんない！だってほらあ、フォースシールドきいてるよお」

「リユーカー反応もない・・・どうなってるんだ」

「よくわかんないけど出来ちゃうみたいなのよねーバーンには」

「バーン？」

「御免なさい。突然お邪魔して」

「えっ！」

キングは驚きのあまり仰け反るとクイーンの椅子に蹴躓き倒れそうになる。

「時間が惜しいの。ショートカットさせて頂きました」

「アリス！」

「ちゃんとやってるよおー！わかんないのお！」

「そんな・・・どうやって」

「わかんないものはわかんないのお！」

「・・・よろしいかしら」

バーンは何事もなかったかのように静かに話し始めた。

「あなた方が連れだした市長と、彼が隠しているモノは今どこにあるのかしら？」

「な・・・」

この混乱の中、不意打ち的な質問で一瞬の沈黙が流れた。

「そう、ありがとう」

「ア、アリス！」

「ちゃんと守ってるよお！誰も頭の中は読まれていない。断言できる！」

この数瞬の間で額にびっしりと汗をかいたキングは念話を送った。

(アリス、本当のことを言え！どうなっている)

(何もされていないのお！ほんとにわからないのお！)

(落ち着いてアリス。キング、あのフォースはフォースパワーは使っていない。反応がないわ)

(ああ、それはわかる。だからこそどーやって船内に入った。それにやつのは確信に満ちた笑みはなんだ)

(キングわりい、身体が思うように動かねえ。俺はさっきから銃をヤツの額にロックしようとしているのに身体はセーフティをロックしたり解除したりを繰り返している。それに全身が凍っちまいそうならいびびっつんのはなんで俺の顔はニヤついているんだぜ。わけわかんねえ・・・)

(言語誘導か?)

(ちがうもん！あの人は何もしていないよ。ずっと見てるもん。あの人のオツムは何もブロックされていない。さっきからトレースしてるよお)

（わたくしもわかりません。さつきから計器をチェックしますけど、何も異常がないのよ。ただ、全てが、何もかもがおかしいの。いつの間にかセキュリティが書き換わって、この船は彼らをいれた人数になっているわ）

（どういうことだ）

（マザーコンピュータは最初から彼らを入れた人数で把握しているってこと。だから侵入者はいないし船内セキュリティも稼働しない。カードの兵隊も稼働していないわ。全く理解を超えているわ）

（あのキャシールがハックした可能性は？）

（考えられないわ。あんな一瞬で、何よりオンラインもしていないのにどうにか出来る筈がないわ。この船のネットワークは今完全に独立なのよ。外部接続はきれている。だってレッドサルンなんだから・・・）

（そうか・・・。じゃーなんだこれは・・・。少なくとも我々の目の前にいるヤツらは何を意味している。これは幻覚なのか）

確かに、この連中は何も触れていない、アリスの心理ブロックも完璧な筈だ。この

距離だからこそ念話もできる。クイーンがこの次元のミスをしたこともない。ならばどうやって入ってきたのだ。底がしれない。特にこのフォース、こいつはモニターにも映っていない。赤外線、紫外線、可視光線全てに反応がない。フォースパワーもゼロに等しい。まるで赤子のようなフォースレベルだ。そしてビショップの言うように何故身体が動かない。動けるのに、思うようには動いていない。まるで別人の身体を操っているようだ。それに動けないのになぜか動ける気がする、なぜだ？何が起きている。

彼らの疑問を打ち消すようにバーンが静かに口を開いた。

「お陰で用はすみました。御免なさいお騒がせして。今あったことは忘れた方がいいわ。あなた達は何も見なかった。何も知らない。そうでしょ」

(アリス、言語誘導くるぞ)

(ちがう。あの人はただ喋っているだけ)

(とにかく警戒しろ)

「バーン？もお、いいの？」

「メタリック？」

「ありがとう。済んだわ」

「まっ、よくわかんないけど、そういうことで邪魔したね」

「待て、虎パン！」

「よお、ビショッブいたの？何、いつぞやの決着つけようっての。忙しいのでまた今度ね」

「ちげえよ！お前・・・何してるんだ。あれだ、ヒューマー狩りはどうしたんだ。お前、誰とも組まねえんじやねえのか！」

「あゝ、そんな時代もあったね。今は決着にもヒューマーにも興味がないってこと。悪しからず」

後ろを向き手を振るジュゲに全員が銃口を向け引き金に力を込める。

「このまま逃げられると・・・」

「と・・・」

「と・・・お？」

「消えてしまいましたわね・・・」

「何がだ？」

「何がって、ほらモニターの」

「ああ、あの連中は何がしたかったんだ」

「アヤトリしたかったんじゃないのお？アリスもしたいなあー」

「その為になぜわざわざレッドサルンに来るか？」

「奴らに乗ってきたビークルは？」

「もうありませんわね。いつの間に行き去ったのかしら」

「何しに来たんだ・・・。ジュゲの動向は気になるが、今は下手に動かないほうがいい

だろう。この山はデカイからな」

「せいぜい内紛にかこつけてヒューマー狩りでもしたいんだろうさ」

「ああ、戦争だからな」

「しかし我々は戦争屋じゃない。戦には加担せんよ。届けるものを届けるだけだ」

「なんだよキング、たまにはデカイのもいいじゃねーか。なまっちまうぞ」

「どのみち否が応もなく戦闘は始まるだろう。だからこそ我々は戦争屋ではないことを忘れるな。肝に命じておけ」

「でも、売られる喧嘩は拒まらずってか」

「そうだ。だが気をつけろ。今度の内戦は規模が大きいぞ。その辺で燻っているのは桁違いだ。下手に巻き込まれれば配達だけでは済まないだろう」

「荷物の中身はなんだべさ？」

「我々は関心を持たない方がいい。月の街の長がもっていたものだ」

「ロクなものじゃねーことは確かか」

「恐らく」

「銀河遺産で盗まれたものだったりして」

「それ以上の詮索はするな」

「へいへい」

「でもキング、さすがの私も気になりますわね。前払いの額が桁違いですもの」

「大きな葛籠と小さな葛籠お」

「アリスも間違っても覗こうとするなよ」

「わかつてるよお。アイツったら葛籠に残留思念の検査機までつけてさあ。連中も入念だねえ」

「互いの敵同士から同時に仕事を受けることになるとはねえ。ヒューマールの戦争好きは死滅するまでなおらねえな」

「本来なら受けたくない仕事だったな。流石に今回は止む終えまい」

「この荷物が双方敵同士に行くってんだからなあ。全くな臭いぜ」

「まあいい。VTは常に中立だ。相応しい仕事があれば受けるのみ」

「ま、そうだな。戦争は戦争屋がやってりやええわ。俺らはこの船が故郷さ。それで楽しくて儲けられれば万々歳よ。クイーン、全額入ったらファッソ級の船かえつぞ。どうするよオイ！」

「・・・む、胸が高まりますわね」

「よーし、配置につけ」

その場にいる全員が無駄のない動作で次々と座席着席すると、クリアーな電子音が

船の可動状況を告げる。

「ワンダーランド起動、リフトアップ開始」

「航路チェック、チェスボード、プログラムアウター 300198214 実行して下さい。」

オートパイロット」

クイーンの発声と共に機械が一斉に息を吹き返す。

「アウター 30019821 実行シマス」

オウム返しをした電子音と同時に動き出した。

船外では闇の中からクツキリと船体が浮かび上がる。全方位が一斉に照らされ、虫一匹いない洞窟が真昼のように照らし出される。光の主であるワンダーランドは十六脚もある巨大な蜘蛛のような足を器用にうねらせ立ち上がった。ワンダーランドと称された巨大な船は、黒光りする巨躯を揺ると、その巨体からは想像も出来ないほど静かな音でその四肢をゆっくりと動かしはじめる。次第にその動きが速くなり、その大きさにしては軽やかな足取りでみるみる速度をあげ、洞窟の奥へと走りさっていった。